

ターゲット英文 8

It is quite amazing the number of things that can be reconstructed — old monuments, parts of human bodies, extinct animals and plants that can no longer be found on earth, crime and accident scenes, environments, cosmic events, dead languages, to name only some.

[宮城大]

一般的に、仮主語(または形式主語)と呼ばれる it は、本来の主語として that 節、to 不定詞、動名詞、疑問詞節を後ろに置くと教わることが多いです。ただし、ターゲット英文8を見ると、後ろには名詞句の the number が置かれています。この形は許されるのでしょうか？

僕たちは前項で名詞句が疑問詞節として解釈されるケース、つまり潜伏疑問文について学びました。それと同じように、名詞句が感嘆詞節として解釈されるケース、すなわち潜伏感嘆文があります。

そして、the number of things that can be reconstructed の部分はまさにその潜伏感嘆文であり、「なんと多くのものが再建されることができるのか」という意味を表すのです(なお、old monuments 以降は、再建されることができる多くのモノの具体例です)。

感嘆文は本来 what / how を用います。この what / how は疑問詞としても使いますね。疑問詞が作る名詞節は間接疑問文と呼ばれますが、よく知られている通り、次の例のように仮主語で受けることができます。

- (1) Young kittens don't have particularly good eyesight, so **it is unclear what they see.**

[共立薬科大]

「幼い子猫は視力が特に良いわけではない。だから、子猫に何が見えているかはよくわからない」

what they see が本来の主語で、それが仮主語の it によって受けられています。名詞節となった疑問文が仮主語で受けられるのと同様、名詞節となった感嘆文も仮主語で受けることができます。

- (2) He realizes, like the rest of us, that **it is amazing how rapidly things can turn around, going from bad to good.**

[神戸松蔭女子学院大]

「彼(=チャーリーブラウン)は、私たちと同じように、物事は悪い方から良い方に、なんと急速に好転するのだろうか、これは驚きだ、と気づく」

この例では it は仮主語の働きで、本来の主語は how が作る感嘆文の名詞節です。以上のことを整理すると、感嘆文は仮主語で受けることが可能で、また、名詞句が感嘆文として解釈される潜伏感嘆文が英語には存在する、ということになります。そしてその二点を統合して考えれば、「感嘆文として解釈される名詞句、すなわち潜伏感嘆文は仮主語で受けられる」ということになりますね。まさにそうした構造が、ターゲット英文8ということなのです。

入試問題からもう一例挙げておきましょう。

- (3) It is amazing **the diversity that we are now seeing that we had missed before.**

[上智大]

「今は私たちが目にしている、これまで見逃していた多様性には、目を見張るものがある」

これはホモ・ナレディという新しいヒト属が発見されたことについての記事の抜粋です。仮主語の it の後ろに本来の主語である the diversity という名詞句があり、これも、「なんと多様なのか」という感じで感嘆文として働いています。なお、ここでは関係詞節が二つ付いているので二重限定と呼ばれる構造になっています(なお、二重限定については §38 も参照してください)。

このように、潜伏感嘆文は〈It is 形容詞 the 名詞句〉という仮主語構文の形で使われることがあります。使われる形容詞は、amazing / incredible / surprising / terrible / odd / remarkable / wonderful などが頻出です。この